

◎野木京子 4月

一所懸命詩を書いてくださっている皆さんに、キャッチボールのように感想の言葉を投げ返したいです。

まだ声がするうちに雪を見に行く

細村 星一郎（東京都）

*わずか一行ながら、今月、私はこの詩を最もすごいと思った。声を発しているのはどのような存在なのか。妖精だろうか。死者だろうか。「まだ声がするうちに」とあるから、声はもうすぐ消えてしまうのだろう。雪が融けて消えゆくことともイメージを重ねている。

満月じゃなくても

月は 月であるように

完璧じゃなくても

私は 私で。

春乃 水香（北海道）

*欠けた月を見るたびにこの詩を思い出しそうだ。月が欠けて見えるのは、太陽の光を受ける部分と影の部分があるだけで、月そのものは変わらない。人間も、隅から隅まで光り輝いている人などはいなくて、どの人も光が当たらない部分を持っている。自分の光の当たらない部分も大切に生きていきたい。

一週間ぶり

人間と対面

二つの目玉に尻込みする

さすらい（神奈川県）

*自粛生活が続き、この気持ちがわかるから、思わずくすりと笑った。「目は心の窓」という言い方があるし、「眼力」という言葉もある。人の「目」を見るというのは、けっこう勇気と体力が要り、そして怖いことだ。

白魚たちみんな僕の間を見て

細村 星一郎（東京都）

*この詩も目が合うことの恐ろしさ。これから食するシラウオ。こちらをじっと見ているそれらが口から食道を下り、胃に入っていく。生きていくことは、命を喰うことで、恐ろしい。忘れ難く映像的でもある。

おひさまみたいなこどもらは

大人より

天国或いはあの世或いは死の

近くにいる

春町 美月（大阪府）

*子どもは異界にまだ片足突っ込んでいる存在だ。「七つ前は神のうち」という民俗学者、柳田国男の言葉を思い出した。小さな子どもと書かずに「おひさまみたいなこどもら」と表現するところに、子どもの体温と、外界の明るさを感じる。繊細な言葉の選び方に感心する。

生き生きと葉桜ゆるる廃病院

燦嗣いとり（愛知県）

*「葉桜」と「廃病院」の頭の「は」がリズムを作る不思議な雰囲気。生命力あふれる若緑色の葉と、人の気配がないしんと静まり返った廃病院の対比にドラマの予感もある。

狂った水で魚を煮る

加藤 美紀（愛知県）

*福島第一原発の処理水の海洋放出のことだろうか。直截な表現にドキリとした。人類は目先だけ考えて、魚を食するために狂った水で煮るしかないのか。

子を育て直面したのは
こんな母でごめんね
と思う出来事たち

きやま いと（兵庫県）

*謙虚な優しさに満ちている詩。私も、若い母親だったころの自分を振り返ると、そんな出来事ばかりだったと思う。共感した。

哀しくない人生も
どこかでは
配られているのだろうか

田中傲岸（熊本県）

*トランプのカードのように、人生も大きな存在の手によって配られているのだろうか。愉快的人生という手札が欲しいわけではなく、望んでいるのは「哀しくない人生」だということも、切なくて、味わい深い。

地下鉄の中で始まるイグアナの話

藤色（京都府）

*おもしろい。乗客がイグアナの話をはじめたのか、それとも地下鉄にイグアナが乗りこんで話し始めたのか。はっきりわからないから、現実と異世界の狭間に落っこちた気分になる。そういえば安西冬衛の一行詩に「鯨が地下鐵道をくぐって食卓に運ばれてくる。」というのがあった。地下鉄は都市の暗渠のようだし、意識下の世界のようなでもある。

私が死んだ後の夕焼けの美しさ

まちりこ（埼玉県）

* 生きている今の私と、死者となった未来の私と、二重の視線が感じられ、重層的な味わいがある。

雨音の夜にこの身を沈めては
石だったころを思い出してる

ベロニカ（神奈川県）

* この詩も、生きている現在の私と、未生の存在だった私という複層の視線。この詩の石は、宇宙の果てから生命の起源を運んできた、隕石かもしれない。